

集落から出土する弥生～古墳時代の紡錘車について—岡山県の事例から—

團 奈 歩

1 はじめに

紡錘車は植物繊維から糸を作るために欠かせない道具であるものの、県内の弥生～古墳時代の集落遺跡から出土する紡錘車の数はさほど多くなく、有機質の紡錘車の存在も想定されることから（文献58）、その実態については不明な部分が多い。

県内の弥生～古墳時代の集落遺跡から出土した紡錘車を概観したところ、出土状況や共伴遺物から、集落内での祭祀に用いられたと考えられるものが一定数存在することがわかった。仮器や祭祀具として位置付けられている紡錘車としては、古墳時代中～後期の鋸歯文を施す滑石製紡錘車があり（文献44・51・55）、県内の古墳出土例については、すでに整理が行われている（文献51）。そこで本稿では、弥生時代～古墳時代にかけての集落遺跡の遺構から出土する紡錘車を整理し、その性格について考えたいと思う。

なお、紡錘車は紡輪と紡茎からなるが、木製の紡茎は土中で失われ、紡輪のみが出土する。このため、紡輪を指して「紡錘車」と呼ぶことが一般的であることから、ここでもそれに倣いたい。

2 分析対象と各部名称

分析対象

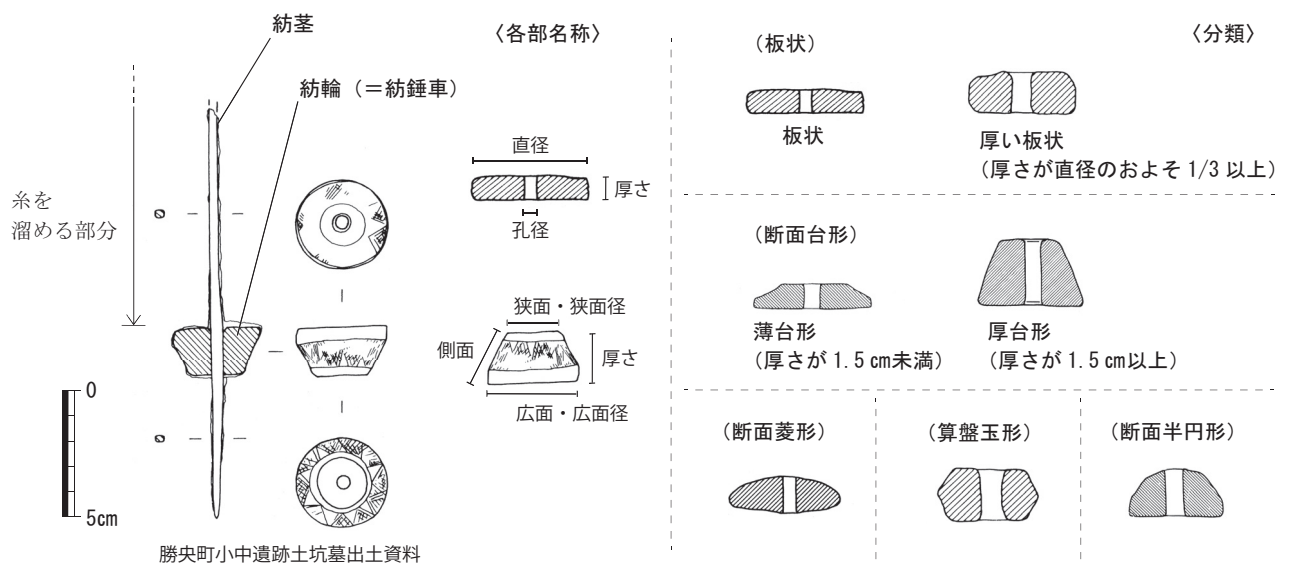
本稿で取り扱うのは、石製・土製・陶製・鉄製で⁽¹⁾、平面形が正円を呈し、中央に直径0.5～0.9cmの孔を持つ紡錘車である⁽²⁾。弥生～古墳時代前期には土器片転用有孔円板が出土する。このうち、円形に成形し、中央の孔が円筒形を呈するものは、紡錘車の可能性があると考えられている（文献59）が、薄手の土器片を利用したものは判別が難しく、また出土状況の検討も必要であると考えたことから、本稿では専用に作られた紡錘車のみを扱う。

分類

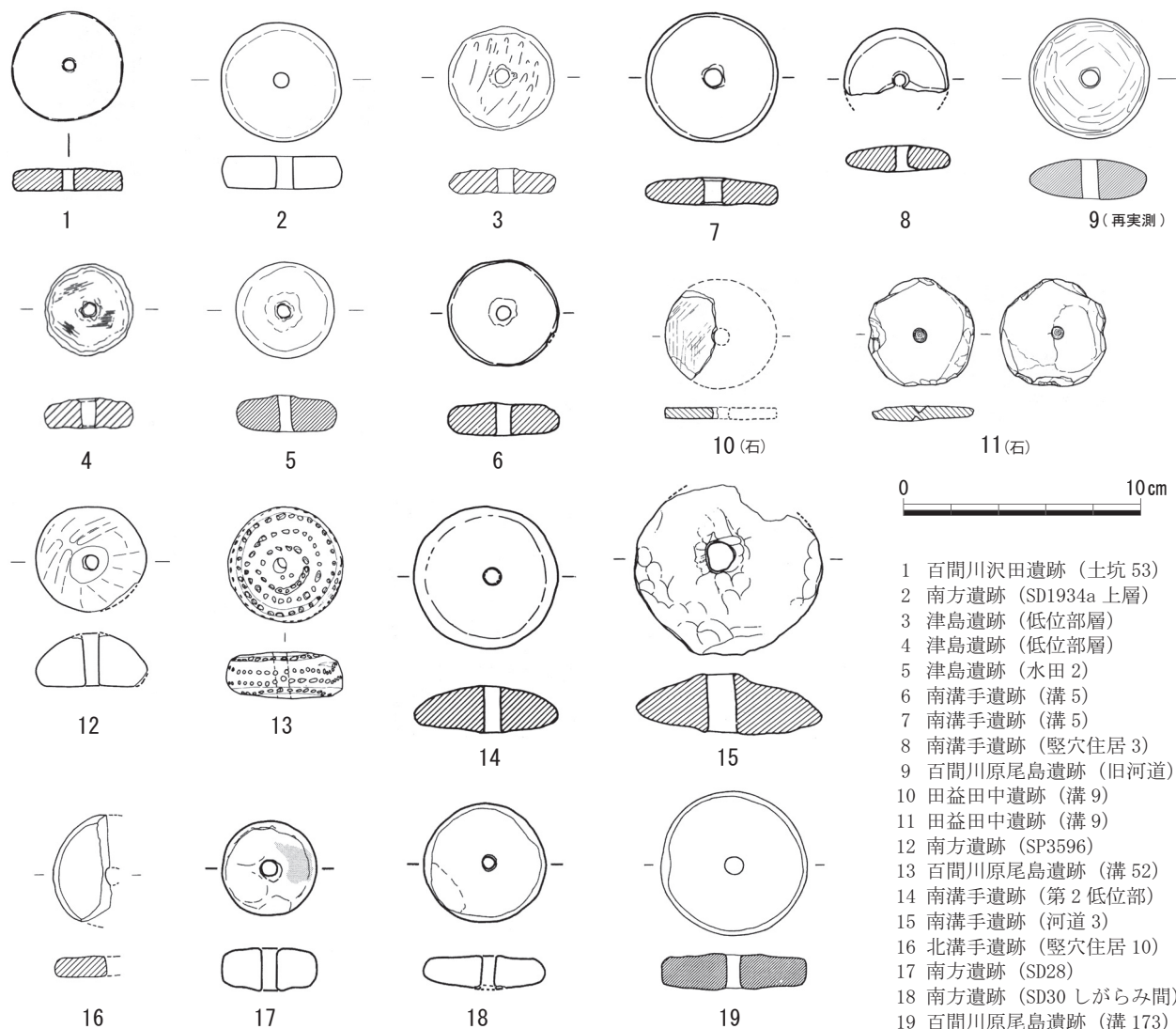
板状（厚さが直径のおよそ1/3以上のものを厚い板状とする）、断面菱形、算盤玉形、断面台形（薄台形：厚さ1.5cm未満、厚台形：厚さ1.5cm以上）、断面半円形と大きく5つに分類した。

各部名称

断面台形を呈する紡錘車は、施文などを考慮し、上部がすぼまる形に図示されることが多い。しかし、撚りをかけ終わった糸を巻き取る際には、すぼまる側を下に向けて使用されることから（第1図）、上・下を用いるこ



第1図 各部名称と分類



第2図 1・2期の紡錘車 (1/3)

とを避け、糸を溜める側を広面、すぼまる側を狭面と表記する。また、その他の形状の紡錘車における直径は、最大径を指す。

3 弥生時代の紡錘車の様相

1 期 (弥生時代前期)

弥生時代前期の紡錘車は6遺跡16点あり、中期前葉にまたがる溝や低位部などから出土したものも加えると25点ある。最も古い時期の紡錘車は、前期前葉～中葉の土器と共伴する総社市南溝手遺跡出土例 (第2図6・7) である。材質は、土製が多いが石製もある。形状は、板状のもの (第2図1～7・13) と、断面菱形を呈するもの (第2図8・9・14・15) がある。直径にはばらつきが見られ、調整はナデのみが多いが、ミガキを施す第

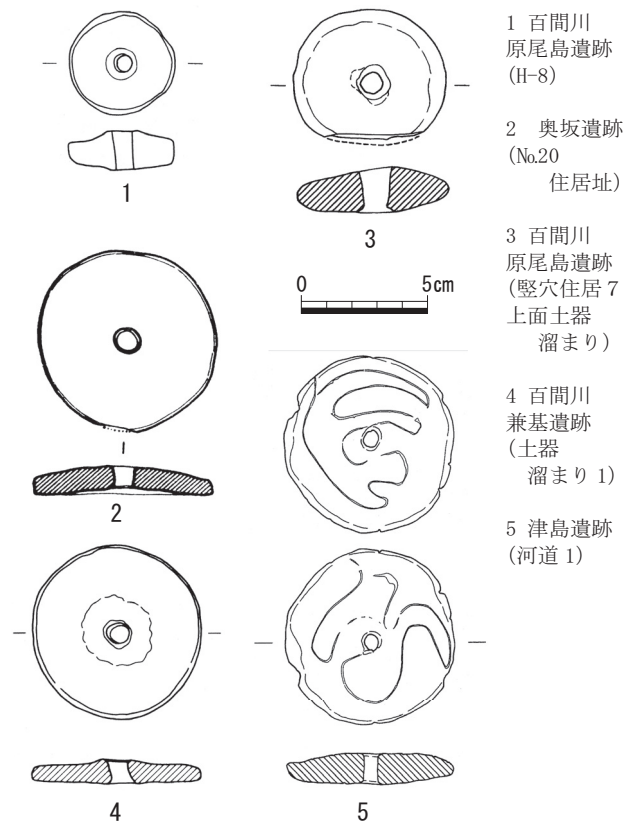
2図3・9や、刺突文を施す第2図13もある。また、第2図15のように、成形時の指オサエが明瞭で直径7.9cm、重量が100gを越えるものは、別の用途も想定される (文献44)。こうした土製紡錘車のうち、堅穴住居からの出土は南溝手遺跡の1点 (第2図8) のみであり、半ばを欠損している。これに対し、溝・旧河道・低位部などからは完形で出土するものが多い。石製品のうち、時期の明瞭なものは岡山市田益田中遺跡の2点 (第2図10・11) にすぎない。しかし、表1に挙げた他の4点は、いずれも板状で、直径は4.6～5.5cm、厚さは土製のものと比べて薄く0.5～0.9cmを測る。前期の土器が共伴することや、中・後期に石製の紡錘車が見られないことなどから、前期の可能性が考えられる。石材は砂岩、頁岩、黒色片岩、結晶片岩、流紋岩など様々である。

2 期（弥生時代中期）

土製のみで、出土量は減少する。4 遺跡 6 点あり、竪穴住居から 1 点、溝から 5 点出土している。形状は板状で、直径は 4～5cm 前半に収まるものと、6cm 大のものがある。調整はナデのみで、一部に指オサエが残る。竪穴住居からの出土は、総社市北溝手遺跡竪穴住居 10 出土例（第 2 図 16）のみであり、1 期同様に欠損した状態で出土している。完形のものは、溝から出土した 4 点がある。岡山市南方（国体開発）遺跡では、中期中葉の河道に設けられたしがらみ 1・2 間の深みから出土した第 2 図 18 が、装飾性の高い把手状の土器や分銅形土製品などの特殊な遺物と共伴して出土している（第 4 図）。岡山市百間川原尾島遺跡溝 173 出土例（第 2 図 19）は、中期の井堰が設けられた溝の下層から出土した。他と比べて大きく、丁寧に仕上げられている。

3 期（弥生時代後期）

土製のみで、出土量は依然として少なく、共伴遺物から時期が明かなものは 4 遺跡 6 点にとどまる。形状は薄い板状を呈するものと、中央部が厚く断面菱形を呈するものがあり、成形や調整などは様々である。直径は 4.2cm が 1 点、5.9～7.4cm が 5 点あり、1・2 期と比して大型のものが多い。出土遺構は、竪穴住居 3 点、土器溜まり 2 点、河道 1 点で、1 点を除き完形で出土している。竪穴住居から出土したもののうち、百間川原尾島遺跡 H-8 出土例（第 3 図 1）は小型で厚い板状を呈するのに対し、岡山市奥坂遺跡 No.20 住居址出土例（第 3 図 2）は大型で板状を呈し丁寧に成形される。2 点がまとまって出土し、うち 1 点は完形である。いずれも共伴遺物に特記すべきものは見られない。土器溜まり出土例のうち、百間川原尾島遺跡竪穴住居 7 上面土器溜まりから出土した第 3 図 3 は断面菱形を呈し、成形時の指オサエが明瞭に残り、側縁部にひび割れが見られるなど全体の仕上げが粗い。淡路型甕や畿内系の土器が共伴する。また、岡山市百間川兼基遺跡土器溜まり 1 から出土した第 3 図 4 は、胎土が精緻で、表面をナデ調整で平滑に仕上げ、厚さも均一であるなど、丁寧な作りである。土器溜まり 1 は、樽形の装飾壺や装飾器台、人形土製品などが出土している土器溜まり 3・4（第 4 図・文献 23）と一連の遺構とされている。岡山市津島遺跡河道 1 出土例（第 3 図 5）は、断面は薄い板状を呈し、成形時の指オサエが残



第 3 図 3 期の紡錘車（1/3）

るなど端部の作りに粗さが見られる一方で、両面に抽象的な弧状の線刻を有する。河道 1 から出土した多量の建築部材の一部は、祭殿に用いられた可能性も指摘されている（文献 61）。また、胎土中に粃などを混和した特殊な壺と特殊な器台、弧帯文をあしらった装飾板や赤彩が施された木製盾、卜骨や骨鏃、人物を描いた絵画土器の他、2000 点を超える桃核などが出土している（第 4 図）。このように 3 期の紡錘車は、その出土状況に特異性が見られる。

4 弥生時代の紡錘車の特徴

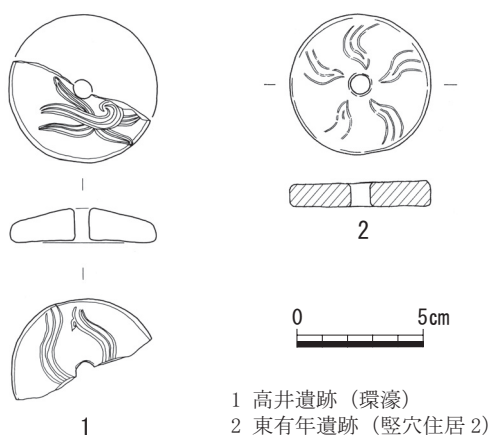
1 期には、土製と石製の紡錘車が一定量見られるが、溝や低位部などからの出土が多い。溝や低位部からは完形品が出土することは多いが、その出土状況や共伴遺物に特異性は見られない。しかし、竪穴住居と土坑からの出土品が大きく欠損していることから、1 期の紡錘車は日常に使用されていた可能性が考えられる。2 期になると、百間川原尾島遺跡溝 173 や南方（国体開発）遺跡しがらみ間のように井堰に関連する遺構から完形の紡錘車が出土する例や、南方（国体開発）遺跡のように特殊な



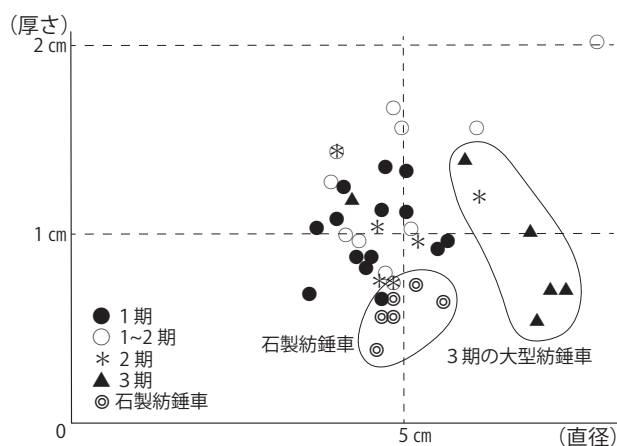
第4図 1・2期の紡錘車と共伴する祭祀具

遺物と共伴する例が見られるようになる。3期になると、大型の紡錘車が集落でのマツリの道具立ての一つとして用いられたことが端的に示される出土状況を呈し、2期以降、集落内でのマツリに用いられる傾向が見て取れる。3期の紡錘車のうち大型のものは成形や調整などが様々であり、百間川兼基遺跡の土器溜まりから出土した人形土製品や樽形の装飾壺、津島遺跡の河道から出土した特

殊な器台と特殊な壺などと同様に、各集落でのマツリのために作られた専用品であったことを示唆している。県内ではこの期の木製紡錘車の出土はないが、鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡から出土した中期後葉～後期の木製紡錘車は薄い板状を呈し、直径5.0～8.4cmと大型のものも見られる（文献48・49）。比重の関係から、木製の紡錘車は土製の紡錘車よりも大きいことが指摘されており



第5図 線刻を有する紡錘車の類例 (1/3)



第6図 弥生時代の紡錘車の規格

(文献57) 3期の大型紡錘車がこうした木製紡錘車を模したものであるならば、土製品は祭祀具として、木製品は日常品として作られたとも考えられる。

また、津島遺跡河道1出土例のような線刻を有する紡錘車の類例として、愛知県豊橋市高井遺跡の後期後半の環濠出土例(第5図1・文献52)、兵庫県赤穂市東有年遺跡の後期中葉の直径12mを測る竪穴住居2出土例(第5図2・文献1)が挙げられる。高井遺跡例では両面に、

東有年遺跡例では片面に線刻が見られるが、いずれも龍と考えられている(文献56)。こうした特殊な紡錘車は各地で見られるようである。

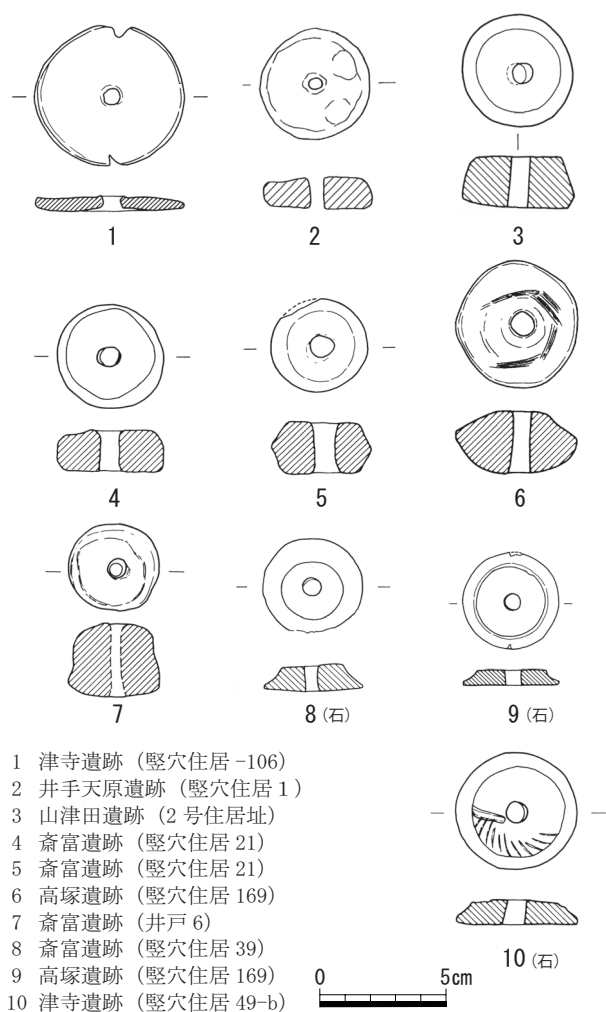
5 古墳時代の紡錘車の様相

4期(古墳時代前期)

土製のみで出土量は少なく、3遺跡3点の出土をみる(第7図1～3)。形状はいずれも板状を呈するが、3期

表1 岡山県から出土した弥生時代の主な紡錘車

図	番号	遺跡名	遺構名	遺物番号	材質	残存状況	形状	直径	厚さ	重さ	孔径	時期	文献
2	1	百間川沢田遺跡	土壌-53	14	土	完形か	板状	4.8	0.8	40.1	0.6	前期中葉	10
2	2	南方遺跡	SD1934a上層	0813	土	完形	板状	5.0	1.4	42.6	0.6	前期中葉	42
2	3	津島遺跡	低位部層	C4	土	完形	板状	4.5	1.1	24.6	0.7	前期	36
2	4	津島遺跡	低位部層	C5	土	完形	板状	3.7	1.3	20.0	0.6	前期	36
2	5	津島遺跡	水田2	C1	土	完形	板状	4.1	1.6	29.8	0.5	前期	34
2	6	南溝手遺跡	溝5	C48	土	完形	板状	4.7	1.4	30.5	0.6	前期前～中葉	18
2	7	南溝手遺跡	溝5	C49	土	完形	板状	5.5	1.2	34.8	0.7	前期前～中葉	18
2	8	南溝手遺跡	竪穴住居3	C18	土	欠損	断面菱形	4.3	1.1	(11.8)	0.6	前期前～中葉	18
2	9	百間川原尾島遺跡	旧河道	C2	土	完形	断面菱形	5.0	1.7	42.2	0.7	前期	35
2	10	田益田中遺跡	溝9	S95	流紋岩	欠損	板状	(4.6)	0.5	(6.9)	(0.6)	前期中～後葉	29
2	11	田益田中遺跡	溝9	S96	流紋岩	未成品	板状	4.7	0.7	19.4	(0.6)	前期中～後葉	29
		百間川沢田遺跡	土壌-46	13	土	欠損	板状	(4.5)	1.1	(13.7)	(0.6)	前期中葉	10
		津島遺跡	低位部層	C1	土	完形	板状	4.7	1.7	43.3	0.7	前期	36
		津島遺跡	低位部層	C3	土	完形	板状	4.0	1.4	22.8	0.7	前期	36
		田益田中遺跡	土壌38	C2	土	欠損(残1/2)	板状	(3.6)	0.9	(5.6)	(0.7)	前期中葉	29
		南溝手遺跡	溝6	C50	土	完形	板状	5.6	1.2	39.2	0.7	前期前～中葉	18
2	12	南方遺跡	SP3596(土壌)	0643	土	完形	断面半円形	4.5	2.1	45.1	0.6	前期後葉～中期中葉	42
2	13	百間川原尾島遺跡	溝52	C43	土	完形	板状	5.0	2.0	58.1	0.7	前期後葉～中期前葉	21
2	14	南溝手遺跡	第2低位部	C68	土	完形	断面菱形	6.1	2.0	66.5	0.7	前期～中期前葉	18
2	15	南溝手遺跡	河道3	C129	土	完形	断面菱形	7.9	2.5	118.9	0.9	前期後葉～中期前葉	22
		南溝手遺跡	溝148	C128	土	完形	板状	4.1	1.2	23.7	0.6	前期後葉～中期前葉	22
		百間川原尾島遺跡	溝12	C5	土	完形	板状	4.3	1.2	26.8	0.7	前期後葉～中期前葉	41
		百間川原尾島遺跡	溝127	C109	土	完形	板状	4.7	1.0	28.4	0.6	前期後葉～中期	16
		南溝手遺跡	溝4	C43	土	欠損	断面菱形	(3.9)	1.6	(12.7)	0.7	前期中葉～中期前葉	18
		南溝手遺跡	溝4	C47	土	ほぼ完形	板状	5.1	1.3	33.0	0.7	前期中葉～中期前葉	18
2	16	北溝手遺跡	竪穴住居10	C9	土	欠損(残1/2)	板状	(4.8)	0.9	(10.6)	(0.6)	中期中葉	40
2	17	南方(国体開発)遺跡	SD28	150	土	ほぼ完形	厚い板状	4.0	1.6	30.4	0.6	中期前～中葉	43
2		南方(国体開発)遺跡	SD30	357	土	完形	厚い板状	4.6	1.6	44.3	0.5	中期	43
2	18	南方(国体開発)遺跡	SD30 しがらみ間深場	348	土	ほぼ完形	板状	5.0	1.3	38.9	0.6	中期中葉	43
2	19	百間川原尾島遺跡	溝173	166	土	ほぼ完形	板状	6.1	1.5	67.8	0.7	中期か	9
		雄町遺跡	O-4 溝	12	土	欠損(残1/2)	板状	4.6	0.9	(13.2)	(0.7)	中期	2
3	1	百間川原尾島遺跡	H-8	1	土	完形	厚い板状	4.2	1.5	24.7	0.7	後期前半	7
3	2	奥坂遺跡	No20住居址	3	土	ほぼ完形	板状	7.2	0.9	47.5	0.9	後期後半	8
		奥坂遺跡	No20住居址	4	土	一部欠損	板状	7.4	0.9	(36.0)	0.9	後期後半	8
3	3	百間川原尾島遺跡	竪穴住居7 上面土器溜まり	C9	土	完形	断面菱形	5.9	1.8	50.7	0.8	後期末	35
3	4	百間川兼基遺跡	土器溜まり1	C2	土	完形	板状	7.0	0.7	45.6	0.9	後期前半	25
3	5	津島遺跡	河道1	C11	土	完形	板状	6.9	1.3	50.8	0.6	後期後半	34
		津島遺跡	包含層	S73	頁岩	完形	板状	4.9	0.9	34.4	0.7	前期か	31
		津島遺跡	包含層	S64	黒色片岩	完形か	板状	4.8	0.7	31.2	0.7	前期か	32
		天神原遺跡	A地点	—	硬質砂岩	欠損(表面剥離)	板状	5.4	0.9	30.2	0.6	前期か	4
		南方遺跡	南東低位部	S433	結晶片岩	ほぼ完形	板状	5.5	0.7	36.7	0.7	前期か	42



- 1 津寺遺跡（竪穴住居-106）
- 2 井手天原遺跡（竪穴住居1）
- 3 山津田遺跡（2号住居址）
- 4 斎富遺跡（竪穴住居21）
- 5 斎富遺跡（竪穴住居21）
- 6 高塚遺跡（竪穴住居169）
- 7 斎富遺跡（井戸6）
- 8 斎富遺跡（竪穴住居39）
- 9 高塚遺跡（竪穴住居169）
- 10 津寺遺跡（竪穴住居49-b）

第7図 4・5期の紡錘車（1/3）

のものと似る大型で薄手の板状を呈するもの（第7図1）と、小型で板状を呈するもの（第7図2・3）がある。いずれも竪穴住居からの出土で、完形である⁽³⁾。このうち岡山市津寺遺跡竪穴住居-106は長軸7mを超える大型住居で、東海系や西部瀬戸内系の土器を出土するなど、集落における中核的存在と推測されている。

5期（古墳時代中期前半）

土製に再び石製が加わる時期である。出土量は増加に転じ、3遺跡7点がある。竪穴住居から6点、井戸から1点が出土し、いずれも完形である。土製のものは4期同様の板状（第7図4）の他、算盤玉形（第7図5・6）、厚台形（第7図7）がある。このうち算盤玉形のものは、いわゆる渡来系遺物である。直径または広面径は3.9～5.0cmで、厚みと重量が増している。石製は薄台形を呈し（第7図8～10）、狭面に線刻するものが1点あるが、無文のものが多い。広面径は3.8～4.7cmで薄手なことか

ら軽量である。いずれも手擦れによる摩滅が見られる。

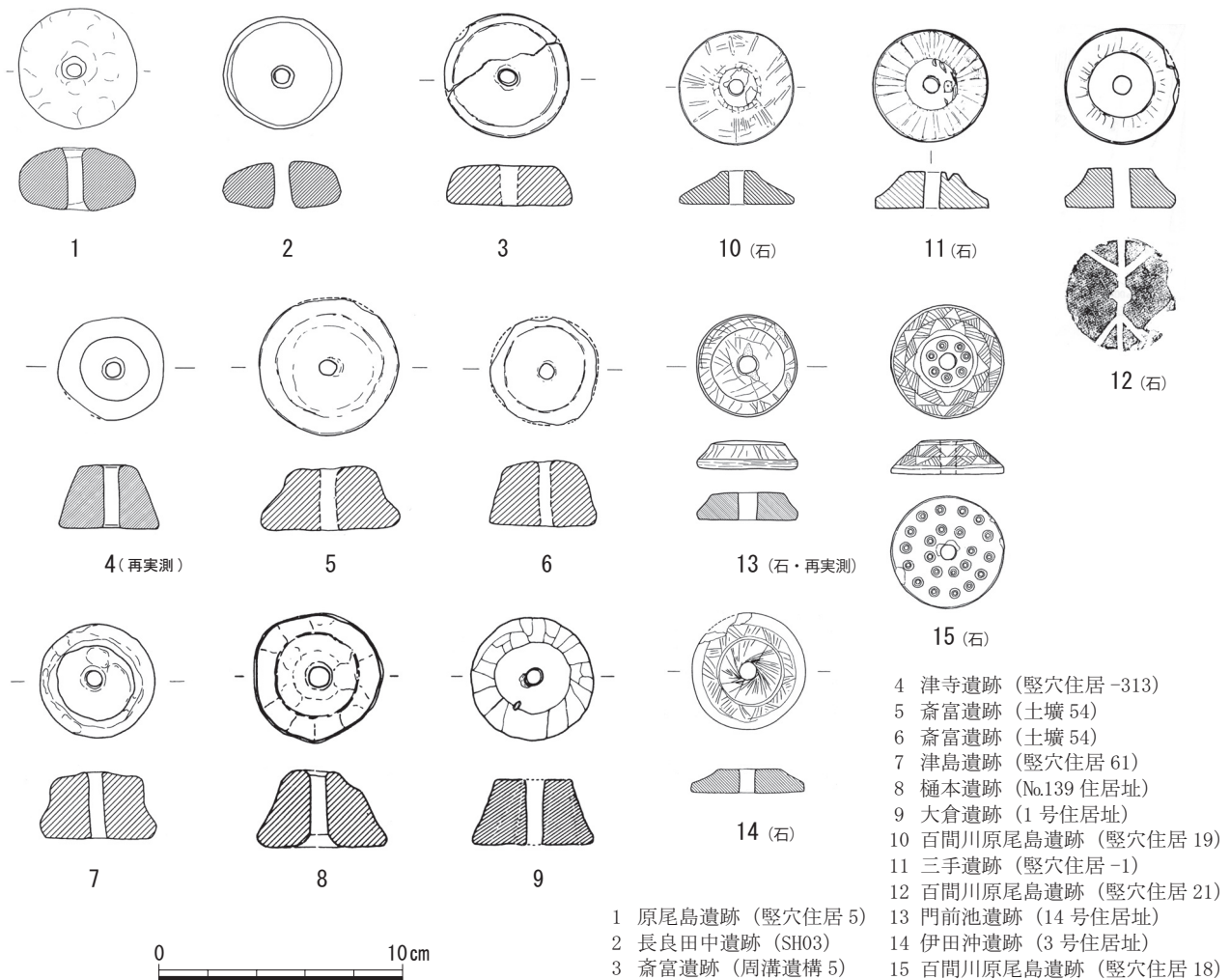
津寺遺跡竪穴住居49-bは焼失住居で、炭化材の上面から多くの土器とともに石製紡錘車（第7図10）が出土し、住居廃絶後の祭祀に関わるものと見られる。赤磐市斎富遺跡竪穴住居39出土例（第7図8）は滑石製で、手捏ね土器と小型壺が共伴する。岡山市高塚遺跡竪穴住居169と斎富遺跡竪穴住居21からは、各2点の紡錘車が出土している。高塚遺跡では算盤玉形の土製紡錘車（第7図6）と石製紡錘車（第7図9）、斎富遺跡では算盤玉形（第7図5）と板状（第7図4）の土製紡錘車というように、双方とも渡来系の算盤玉形紡錘車と組み合せて出土している。高塚遺跡竪穴住居169出土例は手捏ね土器と、斎富遺跡井戸6出土例（第7図7）は土製勾玉、手捏ね土器2点と共伴する。

6期（古墳時代中期後半～後期前半）

土製と石製のものがある。11遺跡19点の出土をみる。土製品は、形状が断面楕円形を呈するもの（第8図1・2）、厚台形（第8図3～9）があり、後者が多数を占める。断面楕円形のものは、算盤玉形の稜線が甘くなったものと考えられる。直径または広面径は4.4～5.7cmで、さらに厚さが増して重くなる。石製も同様に厚さを増し、広面の端部に面取りが施されるものもある。薄台形（第8図10・13～15）と厚台形（第8図11・12）があり、鋸歯文や竹管文を施すものと無文のものがある。広面径は4.1～4.7cmと土製より一回り小さいが、厚さを増して重くなる傾向は同様である。土製・石製を合わせた19点中12点が、竪穴住居から1点ずつ完形で出ている。その他、土坑や溝、周溝遺構からの出土がある。

土製紡錘車が出土する遺構のうち、岡山市原尾島遺跡竪穴住居5出土例（第8図1）は滑石製白玉2点とともに鹿頸骨⁽⁴⁾が共伴する。主柱の抜き取り後に土師器甕が埋められていた津寺遺跡竪穴住居-313出土例（第8図4）は滑石製剣形模造品と共伴する。斎富遺跡土壙54からは2点（第8図5・6）が、土玉1点とともに出土する。

石製のものは、6軒の竪穴住居から1点ずつ出土する。赤磐市門前池遺跡の第8図13は、焼失住居である14号住居址からの出土である。百間川原尾島遺跡では3軒の竪穴住居から出土した。竪穴住居18出土例（第8図15）は石製双孔円板1点、焼失住居で集落最大規模の竪穴住



第8図 6期の紡錘車 (1/3)

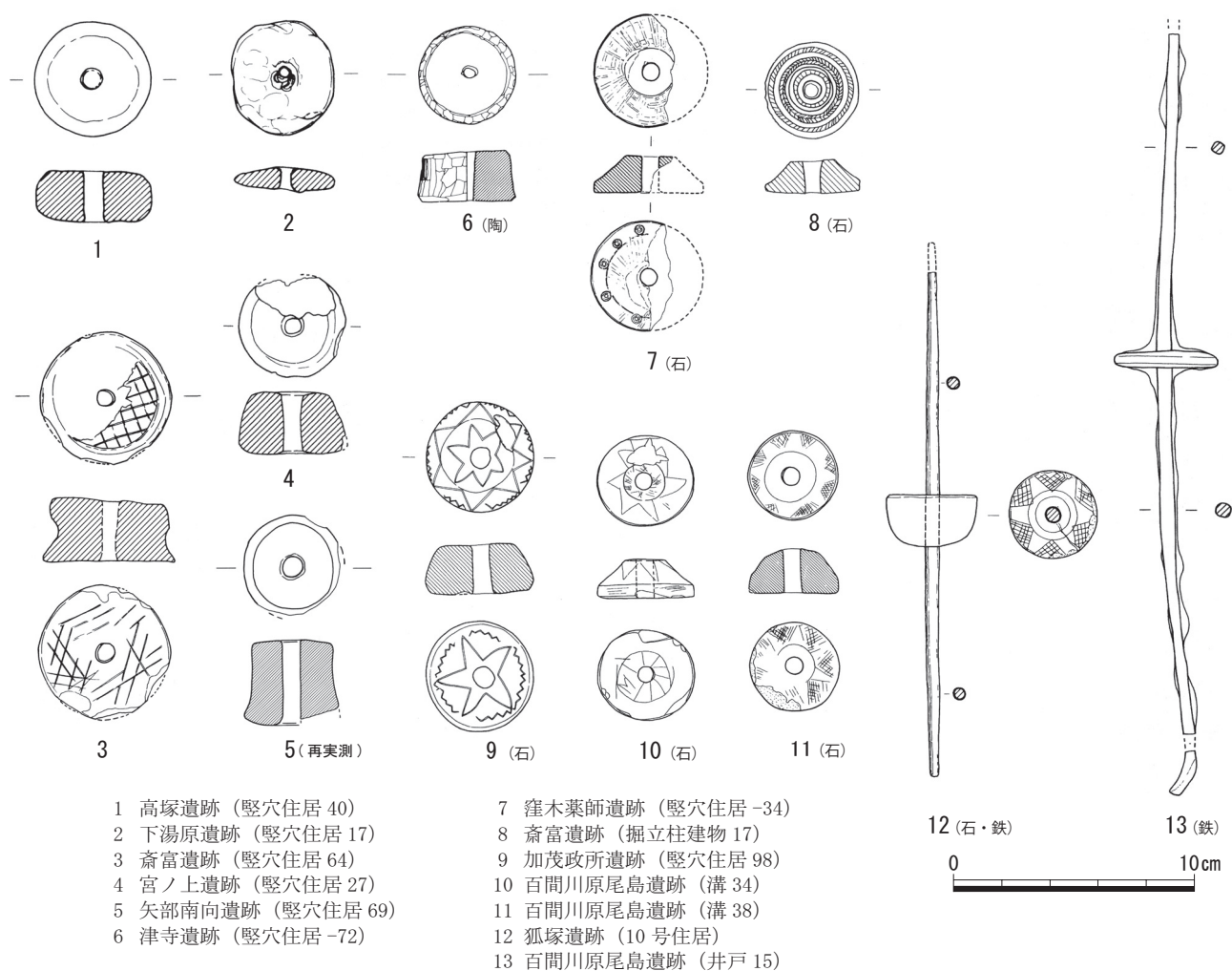
居19出土例 (第8図10) は白玉2点、竪穴住居21出土例 (第8図12) は滑石製有孔板1点と白玉101点及びガラス玉1点と共伴する。大半に手擦れによる摩滅が顕著に見られるが、百間川原尾島遺跡竪穴住居18出土例のみ線刻や加工痕跡が明瞭に残り、未使用もしくはそれに近いと考えられる。

7期 (古墳時代後期後半～)

土製 (須恵質の陶製を含む) や石製に、石製・鉄製の紡輪に鉄製の紡茎からなる紡錘車が加わる。10遺跡19点が出土し、土製8点、陶製1点、石製7点 (うち鉄製紡茎1点)、鉄製3点 (紡輪・紡茎とも) がある。遺構に伴う石製品は少ないが、包含層等からの出土でこの期に属すると考えられる、厚台形または断面半円形を呈し鋸歯文を施す滑石製紡錘車は一定数見られる。土製のものは板状 (第9図1)、断面菱形 (第9図2) または厚台形 (第9図3～5) がある。厚さや細部の形状は様々

であるが調整はいずれもナデで、指オサエの顕著なものがある。陶製 (第9図6) は厚台形で、外面に細かい面取りを施す。石製は薄台形 (第9図8)、厚台形 (第9図7・9・10)、断面半円形 (第9図11・12) のものがある。竹管文や斜線文などを配する総社市窪木薬師遺跡出土例 (第9図7) や斎富遺跡出土例 (第9図8) のように古い様相を残すものもあるが、基本的には鋸歯文をいずれかの面に施す。鉄製は、板状の紡輪を持つ (第9図13)。19点中、竪穴住居からの出土は11点を数え、1点を除き完形である。

土製のものは、真庭市下湯原遺跡の焼失住居である竪穴住居17から2点 (第9図2) 出土している。この集落では同時期の竪穴住居から、小形仿製鏡や鏡形土製品、手捏ね土器、土玉が見つかった。斎富遺跡竪穴住居64出土例 (第9図3) は、やや欠損のあるものの狭・広面に斜格子文が描かれ、土玉が共伴する。勝央町宮ノ上



第9図 7期の紡錘車 (1/3)

遺跡竪穴住居27出土例 (第9図4) は手捏ね土器が共伴する。陶製のものは津寺遺跡竪穴住居-72出土例 (第9図6) が見られるのみで、手擦れは顕著でない。

石製のものは、岡山市加茂政所遺跡竪穴住居98出土例 (第9図9) がある。凝灰岩製で、意図的に下顎骨を外された2頭のウマの頭骨 (文献50) とともに床面付近から出土している。窪木薬師遺跡竪穴住居-34出土例 (第9図7) は半ばを欠いた状態で出土し、滑石製有孔円板と白玉各1点が共伴する。斎富遺跡掘立柱建物17の柱穴からは、手擦れのあまり見られない紡錘車 (第9図8) が出土している。斎富遺跡ではこのほかにも、2本の柱穴から完形の土製紡錘車が出土している。同一の溝と見られる百間川原尾島遺跡の溝34・38からは石製紡錘車が計3点出土している。ここでは7世紀前葉の多器種の須恵器が出土し、集落内の祭祀に使用された土器が一括廃棄されたと理解されている。

鉄製の、大きく欠損した状態で包含層などからしばしば出土するが、ほぼ完形のものが竪穴住居と井戸から各1点、出土している。百間川原尾島遺跡井戸15出土例 (第9図13) と共伴する甑の体部には穿孔が見られる。

6 古墳時代の紡錘車の特徴

4期の紡錘車は、弥生時代から引き続き出土量が少ないものの、竪穴住居から完形で出土する。弥生時代と異なり、古墳時代の遺構から出土した紡錘車は、竪穴住居からの出土が全体のおよそ2/3を占め、かつ完形の出土が多く、その様相はこの時期から見られる。津寺遺跡出土例 (第7図1) のように3期の紡錘車に通じる形状は、4期が過渡的な状況であることを示すのかもしれない。

5期は新しく石製紡錘車と土製の算盤玉形紡錘車が出土する時期である。この時期の集落では、井戸出土の1

例を除き竪穴住居から完形で出土する。津寺遺跡竪穴住居49-bや斎富遺跡井戸6の出土例のように竪穴住居の廃絶や井戸の祭祀に用いられたことを示すものや、土製模造品と共伴するものが見られるようになる。

6期には、鋸歯文や斜線文を施す石製紡錘車が現れる。紡錘車が出土した竪穴住居の半数で土製または石製の模造品が見られ、土製紡錘車は土製・石製模造品と、石製紡錘車は石製模造品と共伴するようである。原尾島遺跡竪穴住居5や百間川原尾島遺跡竪穴住居21のように獣骨や多量の白玉と共伴し、何らかの祭祀に用いられた状況を呈するものが見られる。

7期には、集落から出土する土製紡錘車と古墳に副葬される鋸歯文を施した石製紡錘車の使い分けが指摘されている（文献51）。竪穴住居から出土する石製紡錘車も少量あるが、凝灰岩製の加茂政所遺跡出土例（第9図9）や竹管文を施す窪木薬師遺跡出土例（第9図7）など、古墳に副葬されるものとは様相が異なっている。一方、鋸歯文を施した滑石製紡錘車が、集落において遺構以外の場所から出土する状況は、古墳に副葬される前の保管場所に起因するのかもしれない。鉄製紡錘車は糸の品質に関わる実用性がいわれている（文献57）が、百間川原尾島遺跡井戸15出土例はそうした実用的な鉄製紡錘車がなんらかの祭祀に用いられた可能性を示している。

古墳時代を通して、土製紡錘車が出土する竪穴住居は遺跡ごとに各期で1軒のみである。石製紡錘車が出土する竪穴住居も同様であり、例外としては6期の百間川原尾島遺跡の3軒があるが、この期に属する未製品が溝から出土しており（文献13）、集落内で製作が行われてい

たことに起因するものであろう。これらの紡錘車が出土する竪穴住居の中には、規模が大きく外来系の土器などを出土するものがあり、集落の中核をなす世帯であったことが考えられる。また、土製・石製模造品の他、ガラス玉や人の手の加わった獣骨、穿孔された土器といった祭祀具と思われる遺物としばしば共伴することから、紡錘車そのものが、時に祭祀の道具として献じられたことが伺いしれる。さらに、5期以降に出土する石製の紡錘車は、手擦れの明瞭なものが多い。こうした痕跡から実際に使用されていたことは明確で、祭祀の過程で生じたものと理解されている（文献54）。これに集落における出土数が少ないことを考えあわせると、石製紡錘車は特定の世帯が保有するものであり、祭祀に用いるような特別な布を織るための糸を紡ぐのに使用されたのではないだろうか。土製紡錘車についても出土数が石製紡錘車とさほど変わらないことからすると、やはり保有した世帯は限られていたと考えられ、石製紡錘車を補完するものであったものと推測される。5期の竪穴住居では算盤玉形紡錘車が他の紡錘車と共に出土する状況が見られるが、この算盤玉形紡錘車は直状系の製織技術の導入地域を推定することのできる渡来系遺物とされており（文献57）、紡錘車を有する世帯は先進的な紡織技術の導入にも主体的に関わり、糸・布の生産や祭祀に携わったものと思われる。

7 結語

岡山県で出土する紡錘車は、弥生時代中期から古墳時代にかけて集落における祭祀の道具として用いられた状

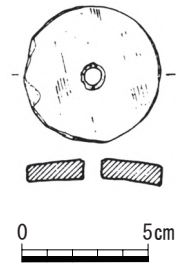
表2 岡山県の古墳時代集落から出土した主な紡錘車

図	番号	遺跡名	遺構名	遺物番号	材質	残存状況	形状	直径	厚さ	重さ	孔径	時期	共伴遺物等	文献
								狭面径 広面径						
7	1	津寺遺跡	竪穴住居-106	C77	土	完形	板状	5.8	0.6	18.3	0.7	前期前半		19
7	2	井出天原遺跡	竪穴住居1	C1	土	完形	板状	4.4	1.3	29.0	0.6	前期前半		38
7	3	山津田遺跡	2号住居址	—	土	完形か	厚い板状	4.4	2.0	—	0.7	前期前半		45
7	4	斎富遺跡	竪穴住居21	R1	土	完形	厚い板状	4.3	1.6	33.5	0.7	中期前半		20
7	5	斎富遺跡	竪穴住居21	R2	土	完形	算盤玉形	3.9	2.1	32.8	1.0	中期前半		20
7	6	高塚遺跡	竪穴住居169	C175	土	完形	算盤玉形	5.0	2.3	53.0	0.8	中期前半	手捏ね土器1	30
7	7	斎富遺跡	井戸6	R7	土	完形	厚台形	3.2 3.5	3.1	38.0	0.6	TK208	土製勾玉1 手捏ね土器2	20
7	8	斎富遺跡	竪穴住居39	R3	滑石	ほぼ完形	薄台形	2.5 4.0	1.0	19.1	0.5	中期前半	手捏ね土器1	20
7	9	高塚遺跡	竪穴住居169	S236	蛇紋岩	完形	薄台形	2.8 3.8	0.6	12.9	0.6	中期前半	手捏ね土器1	30
7	10	津寺遺跡	竪穴住居49-b	S69	滑石	完形か	薄台形	4.7	0.9	32.4	0.7	5世紀前半	焼失住居 廃絶後祭祀	17

紀要第2号

図	番号	遺跡名	遺構名	遺物番号	材質	残存状況	形状	直径	厚さ	重さ	孔径	時期	共伴遺物等	文献
								狭面径 広面径						
8	1	原尾島遺跡	竪穴住居5	C3	土	完形	断面楕円形	4.9	2.5	65.2	0.8	TK47	臼玉2 鹿顎骨	28
8	2	長良小田中遺跡	SH03	144	土	完形か	断面楕円形	4.8	1.9	—	0.7	TK47		46
8	3	斎富遺跡	周溝遺構5	R6	土	完形	厚台形	4.5 5.1	1.7	47.9	0.8	TK47	円板状土製品1	20
8	4	津寺遺跡	竪穴住居-313	C318	土	完形	厚台形	2.6 4.4	2.6	42.3	0.8	TK47	滑石製剣形模造品 柱抜き取りに土師器甕	26
8	5	斎富遺跡	土壇54	R9	土	ほぼ完形	厚台形	3.6 5.7	2.7	83.2	0.7	MT15	土玉1	20
8	6	斎富遺跡	土壇54	R10	土	ほぼ完形	厚台形	3.3 4.4	2.6	59.9	0.6	MT15		20
8	7	津島遺跡	竪穴住居61	C39	土	完形	厚台形	3.1 4.8	2.7	65.0	0.6	MT15	手捏ね土器1	34
8	8	樋本遺跡	No139住居址	1	土	完形	厚台形	3.2 5.3	3.4	69.7	0.9	MT15		11
8	9	大倉遺跡	1号住居址	1	土	完形	厚台形	2.8 4.8	2.7	50.6	0.7	6世紀前半		6
		原尾島遺跡	溝18	C11	土	ほぼ完形	厚い板状	4.5	2.0	52.6	0.9	5～6世紀		28
8	10	百間川原尾島遺跡	竪穴住居19	S79	滑石	完形	薄台形	1.7 4.7	1.4	31.6	0.7	MT15	臼玉2 焼失住居	39
8	11	三手遺跡	竪穴住居-1	S1	滑石	完形	厚台形	2.3 4.5	1.5	41.1	0.6	TK23～TK47		14
8	12	百間川原尾島遺跡	竪穴住居21	S32	滑石	完形	厚台形	2.8 4.6	1.6	46.0	0.8	TK47	滑石製有孔円板1 臼玉101、ガラス小玉1	13
8	13	門前池遺跡	14号住居址	3	滑石	完形	薄台形	2.9 4.1	1.1	30.8	0.8	TK47	焼失住居	5
8	14	伊田沖遺跡	C地区 3号住居址	—	石	完形	薄台形	2.7 4.6	1.0	—	0.6	5世紀後半		60
8	15	百間川原尾島遺跡	竪穴住居18	S75	滑石	完形	薄台形	2.3 4.6	1.4	38.6	0.7	TK47	滑石製双孔円板1	39
		斎富遺跡	土壇43	R8	滑石	欠損	厚台形	2.1 —	—	(7.9)	0.6	TK47		20
		百間川原尾島遺跡	溝37	S34	輝緑岩	木製品	厚台形	2.9 5.1	1.7	62.5	無	5世紀末頃か		13
		原尾島遺跡	溝18	B55	蛇紋岩	完形	薄台形	2.6 4.1	1.3	29.4	0.7	5～6世紀		28
9	1	高塚遺跡	竪穴住居40	C92	土	完形	厚い板状	4.8	2.1	59.0	0.8	TK209～TK217		30
9	2	下湯原B遺跡	竪穴住居17	C6	土	完形	断面菱形	4.7	0.9	18.9	0.5	TK43		33
		下湯原B遺跡	竪穴住居17	C7	土	完形	断面菱形	4.3	1.6	23.6	0.6	TK43		33
9	3	斎富遺跡	竪穴住居64	R4	土	やや欠損	厚台形	4.5 5.5	2.7	74.7	0.7	TK10	土玉1	20
9	4	宮ノ上遺跡	竪穴住居27	C4	土	完形	厚台形	3.5 4.4	2.5	(45.2)	0.8	TK209	手捏ね土器1	37
9	5	足守川 矢部南向遺跡	竪穴住居69	C136	土	やや欠損	厚台形	3.4 4.3	3.6	60.7	0.8	TK10		15
		斎富遺跡	柱17	R13	土	完形	厚台形	1.8 3.5	2.0	21.9	0.6	後期後半		20
		斎富遺跡	柱19	R15	土	完形	厚台形	3.0 5.2	2.3	48.3	0.6	後期後半		20
9	6	津寺遺跡	竪穴住居-72	C5	土 (陶製)	完形	厚台形	3.5 4.0	2.1	47.3	0.6	TK209		24
9	7	窪木薬師遺跡	竪穴住居-34	S-15	緑色 片岩	欠損	厚台形	2.2 4.6	1.5	(27.3)	0.7	TK43	滑石片岩製有孔円板1 蛇紋岩製臼玉1	12
9	8	斎富遺跡	掘立柱建物 17	R 5	滑石	完形	薄台形	1.9 3.9	1.3	24.9	0.6	6世紀後半		20
9	9	加茂政所遺跡	竪穴住居98	S298	凝灰岩	完形	厚台形	3.2 4.3	2.0	37.2	0.8	TK209	ウマ2頭分の下顎骨	27
9	10	百間川原尾島遺跡	溝34	S82	滑石	ほぼ完形	厚台形	1.8 4.0	1.6	30.7	0.7	TK209	同一の溝 多器種の須恵器	39
		百間川原尾島遺跡	溝34	S83	滑石	欠損	断面台形	— 3.9	(0.8)	(18.4)	0.8	TK209		39
9	11	百間川原尾島遺跡	溝38	S36	頁岩	完形	断面半円形	2.4 3.7	1.9	36.7	0.8	TK209		13
9	12	狐塚遺跡	10号住居	5	滑石 紡茎：鉄	完形	断面半円形	2.2 4.0	2.3	(71.1)	0.7	TK209か		47
9	13	百間川原尾島遺跡	井戸15	M42	鉄	ほぼ完形	板状	4.3	0.7	(53.6)	0.5	TK209	甕体部に穿孔	35
		津寺遺跡	竪穴住居-38	M9	鉄	完形	板状	4.5	0.8	(45.3)	0.6	TK209～TK217		24
		斎富遺跡	土壇61	R11	鉄	欠損	板状	4.2	0.5	(14.5)	0.5	TK209		20

況が認められる。弥生時代には集落全体で行われたであろうマツリに捧げられたようであるが、古墳時代には特定の世帯が保持して祭祀のための布を製作するのに使用されたのだろう。祭祀具として製作された紡錘車が実際に使用されたことは、植物繊維から糸



第10図 紡錘車の可能性のある土器片転用有孔円板（1/3）

を作り出す行為そのものが祭祀にとって重要であったことを示している。そしてそこには紡織を担った女性が大きく関わっていたのだろう。なお、今回対象から外した土器片転用の有孔円板のうち、弥生時代後期後半の井戸である上東遺跡P-ハ出土例（第10図・文献3）は、黒漆を塗布した特殊な木製盾と共伴し、3期の土製紡錘車と同様の出土状況を呈する。このことは、土器片転用の有孔円板が紡錘車として用いられていたことを示しているように思われる。今後の検討課題としたい。

遺物の実見に際しては、岡山市埋蔵文化財センター、総社市埋蔵文化財学習の館、津山弥生の里文化財センターの協力を得た。記して感謝いたします。

註

- (1) 弥生～古墳時代の有機質（木・鯨骨・鹿角など）製紡錘車は、管見による限り県内では知られていない。
- (2) 紡茎が遺存する紡錘車などから、孔径は0.6～0.8cmのものが妥当とされる（文献52・56）が、0.5cmや0.9cmのものも見られたため、幅を持たせることとした。
- (3) 山津田遺跡出土品は実測図から完形の可能性が高い。
- (4) 鹿かどうかは未鑑定である。

引用・参考文献

- 1 赤穂市教育委員会2003「東有年・沖田遺跡」『赤穂市文化財調査報告書』56
- 2 岡山県教育委員会1972「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1
- 3 岡山県教育委員会1974「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2
- 4 岡山県教育委員会1975「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7

- 5 岡山県教育委員会1975「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』9
- 6 岡山県教育委員会1977「大倉遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20
- 7 岡山県教育委員会1980「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39
- 8 岡山県教育委員会1983「奥坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53
- 9 岡山県教育委員会1984「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56
- 10 岡山県教育委員会1985「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59
- 11 岡山県教育委員会1987「樋本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』65
- 12 岡山県教育委員会1993「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86
- 13 岡山県教育委員会1994「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88
- 14 岡山県教育委員会1994「三手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90
- 15 岡山県教育委員会1995「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94
- 16 岡山県教育委員会1995「百間川原尾島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97
- 17 岡山県教育委員会1995「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98
- 18 岡山県教育委員会1995「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100
- 19 岡山県教育委員会1996「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104
- 20 岡山県教育委員会1996「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105
- 21 岡山県教育委員会1996「百間川原尾島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106
- 22 岡山県教育委員会1996「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107
- 23 岡山県教育委員会1996「百間川兼基遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』114
- 24 岡山県教育委員会1997「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116

- 25 岡山県教育委員会1997「百間川兼基遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』119
- 26 岡山県教育委員会1998「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127
- 27 岡山県教育委員会1999「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138
- 28 岡山県教育委員会1999「原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139
- 29 岡山県教育委員会1998「田益田中（国立岡山病院）遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』141
- 30 岡山県教育委員会2000「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150
- 31 岡山県教育委員会2000「津島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151
- 32 岡山県教育委員会2001「津島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』160
- 33 岡山県教育委員会2002「下湯原B遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』166
- 34 岡山県教育委員会2003「津島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173
- 35 岡山県教育委員会2004「百間川原尾島遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179
- 36 岡山県教育委員会2005「津島遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』190
- 37 岡山県教育委員会2006「宮ノ上遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』197
- 38 岡山県教育委員会2006「井出天原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』198
- 39 岡山県教育委員会2008「百間川原尾島遺跡7」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』215
- 40 岡山県教育委員会2012「北溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』235
- 41 岡山県教育委員会2013「百間川原尾島遺跡8」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』239
- 42 岡山市教育委員会2018「南方遺跡－岡山済生会総合病院新病院建設に伴う発掘調査－」
- 43 岡山市教育委員会2021「南方（国体開発）遺跡発掘調査報告－ファミリータワープラザ岡山建設に伴う発掘調査－」
- 44 國下多美樹1988「京都府下の紡錘車について」『京都考古』第50号記念号 京都考古刊行会
- 45 総社市教育委員会1984「山津田遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1
- 46 総社市教育委員会2011「長良小田中遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』22
- 47 津山市教育委員会1974「狐塚遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第2集
- 48 鳥取県教育文化財団2001「青谷上寺地遺跡3」『鳥取県教育文化財団調査報告書』72
- 49 鳥取県教育文化財団2002「青谷上寺地遺跡4」『鳥取県教育文化財団調査報告書』74
- 50 富岡直人1999「岡山県加茂政所遺跡出土ウマ遺存体」「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138 岡山県教育委員会
- 51 豊島雪絵2001「古墳時代における石製紡錘車の性格－中国・近畿地方出土例を中心に－」『古代吉備』第23集 古代吉備研究会
- 52 豊橋市教育委員会1996「高井遺跡」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告』第26集
- 53 中沢悟2013「紡錘車について」『山梨県考古学協会2012年度研究集会 紡織の考古学－紡ぐ・織る・縫う－ 資料集』山梨県考古学協会
- 54 中山学1998「広島県内出土の滑石製鋸歯文紡錘車について」『文化財論究』第1集 財団法人東広島市教育文化振興事業団
- 55 中山学2006「滑石製鋸歯文紡錘車消長の意義」『季刊考古学』第96号 雄山閣出版
- 56 春成秀爾2011『祭りと呪術の考古学』塙書房
- 57 東村純子2011『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
- 58 古澤義久2016「なぜ紡錘車が出土しないのか－民族誌・民俗事例からの想定－」『考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集』中国書店
- 59 松本直子2002「弥生時代前期の土器片円盤類－紡錘車である可能性の再検討－」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』古代吉備研究会
- 60 御津町教育委員会1988「伊田沖遺跡」『御津町埋蔵文化財発掘調査報告』4
- 61 宮本長二郎2003「津島遺跡出土建築材の復元」『津島遺跡4 岡山県埋蔵文化財調査報告書』173 岡山県教育委員会